骨折事変２０２２

SOLAN 小学校の職員室には、色んな才能が集まってきています。

全国大会で活躍した選手や、世界を股にかけて活動を展開している方など、第一線で活躍してきた方も少なくありません。

その中には、ドッジボールで全国プレイヤーとして名を馳せた方もいます。

水曜日の朝のことでした。

その方から、

「渡辺先生、昼休みにドッジボールをやりませんか？」

とのお誘いがありました。

私も肩と足には自信がある方だったのですぐさま快諾。

子どもたちに模範演技を見せるデモンストレーションのような形で、キャッチボールが始まりました。

ビュンビュンとボールが行き交う様を見て、子どもたちがすぐさま言いました。

「一緒にドッジボールやりたい！」と。

人が「何かを始めたい」と思う時に「憧れ」という気持ちは大きな原動力になります。

そこで、デモンストレーションの締めくくりにその方の渾身の一球を受けることにしました。（当然子どもたちとは十分な距離を取った上で）

さすがの全国プレイヤーは足元近くの低めに唸るほどの剛速球を投げてきましたが、私はこれを（自分で言うのもなんですが）見事にキャッチ。

子どもたちから「オォー！」と歓声が上がりました。

ここまでは、良かったのです。
その後、子どもたちも交えて和気あいあいとドッジボールが始まったわけですが、その時に私は腕に違和感を覚えました。
ん？と思って見てみると、手首が大きく腫れています。
そこはまさしく、先ほどの渾身の一投を捕球した時にボールが当たった場所でした。
経験したことが無いほどの腫れだったことと、場所が「手首」だったこともあり、私は子どもたちに分からないように素早く保健室に行きました。
そこで、保健の田中先生はじめ色んな方にも見てもらいましたが、どの方も次の意見で一致しました。
「すぐに病院に行きましょう。」
まさかの事態でしたが、手首の腫れは一向に収まる気配が無いので私は仕方なく近くの病院に行くことにしました。
病院に着くなり、救急外来の担当医の方がスピーディーに診察をして下さり、すぐさまレントゲンを撮ることになりました。
その写真をみながら、先生が一言
「これはひびですね。白い線が入っているでしょう。いわゆる骨折です。」
と言い放ちました。
まさか！という事態はこれほど続くのかと思いました。
ドッジボールとはいえ、全国クラスの球の怖さを知った瞬間でした。
その後、私は金属入りのギブスのような金属装具をつけてもらい、首から吊る形で包帯を巻いてもらい、よく見る形の「ザ・骨折患者」の姿に早変わりしました。

こんな感じです。→→→
剛速球を受けてからわずか１時間ほどの実にスピーディな変化でした。
この姿まま学校に戻るのはとてもはばかられましたが、翌日以降も授業することを考えると仕方ありません。

教室に戻ると、案の定子どもたちが大騒ぎとなりました。
「先生どうしたのーーーー！？」
「えーーーー骨折――――！？」
自分自身にもまさかの出来事だったので、子どもたちからすればさらに大きな衝撃だったでしょう。
でも、その後のやり取りは実に私の心を勇気づけてくれるものでした。
「先生、給食を運ぶとき、僕が持つからね。」
「先生、百玉そろばんでガッチャンてする時私がやってあげるからね。」
「先生、痛かったよね。でもちゃんと治るから大丈夫だよ。」
思いやり溢れる言葉の数々に、幾度も心がじーんとなりました。
どの子もどの子も、心配をして労わってくれました。
優しい子たちです。
温かい子たちです。
まさかの骨折をしたことによって、子どもたちのそうした素敵な心根に触れられたことは、私にとってとても嬉しいものでした。
まさにケガの功名です。
とはいえ、左手を使えなくなったことによって、私の生活シーンは一変しました。
最初に困ったのは、マスクでした。
片手でマスクをつけるのはこんなに大変なのかと思いました。
次に、スマホを充電することに困りました。
当たり前ですが、ケーブルを差し込む時は押さえる手と押し込む手の両方があって初めて成り立つものです。
他にも、普段意識していなかった利き手ではない左手が、いかに大切な役目を担ってくれていたかを実感することとなりました。
その生活をしながら、大好きなロックバンドの歌詞が頭に浮かびました。

熱が出たりすると気づくんだ　ぼくには体があるってこと
鼻がつまったりするとわかるんだ　今まで呼吸をしていたこと
君の存在だって　何度も確かめはするけど
本当の大事さは　いなくなってから知るんだ

無くなって初めてその有難さに気づくのは、人生の常なのかもしれません。

さて、その翌日（木曜日）です。
病院から、次の日も受診するように言われていた私は、朝のモジュール学習を終えてから再度病院に行きました。（朝のモジュール学習の時は、三角巾で相変わらず腕を吊っている状態だったので、子どもたちが再び何度も労わってくれました。）
病院についてから向かったのは、整形外科。
前日の救急外来とは違い、専門医の診察を受けるための来院でした。
レントゲンをまじまじと見たその担当医の方の口からは、
「これは本当にひびかな？と思っています。私の見立ては違います。」
と最初から衝撃的な一言が。
白黒ハッキリつけるために CT まで撮る顛末となりましたが、結局「ひび」と言えるほどのものではないことが分かりました。（期間としても要は打撲なので１週間程度で治るだろうとのことでした。）
前日の診断がこのように覆るケースも人生初だったのでとても驚きましたが、そういうことも起こりうるのだということを今回学びました。
もちろん、初日の処置も決して間違っていたわけではないそうで、吊って安定させてもらえたことによって痛みも確かに和らぎました。

問題は、この後です。
三角巾が解かれ、私の腕にはサポーターのような装具だけが装着されることとなりました。
見た目としては大きな変化です。
学校に戻ると、その見た目の変化に子どもたちは再び声を上げました。
「ええー！もうそんなに治ったの！？」
「先生すごーーい！」
と、驚異の治癒力を発揮した人物のように扱われてしまったのです。
お医者さんの名誉も守りたかったですし、診察の経緯を学年全員に細かく説明することも不可能だったので、
「ありがとう、みんなのおかげで少しずつ良くなってきたよ。」
と説明するにとどめましたが、子どもたちの間では「渡辺先生ってやっぱり

すごいよな」という不思議な噂話が現在広がっているところです。

実は今回、保護者の方からもいろんな形でご心配やねぎらいの言葉をかけて頂いたので、この場を借りて顛末を説明させて頂きました。

青天の霹靂が続いた２日間でしたが、私としては、子どもたちやお家の方々の優しさに触れ、自分の体が元気に動くことの有難さをしっかりと感じさせてもらえた貴重な時間にもなりました。このコスモスハーモニーもしばらく発刊が不可能かと思いましたが、おかげさまで元気に左手も動くようになり、今、パチパチとタイピングができることにも感謝の思いが生まれてきているところです。

人生の学びは、色んな所から色んな形でもたらされることを改めて感じた２日間でした。（文責：渡辺道治）

１学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)